

鳥取の海を 見よう！知ろう！感じよう！伝えよう！

鳥取の漁村を知る

～研究目的～

全国の漁村では、過疎化による後継者問題が進行している。過疎化の原因、改善点を、学生の意見と漁師の意見を参考にしながら導き出す。また、若者に漁師の生活を知ってもらうことで、興味、関心を持ってもらうということを、研究目的とした。

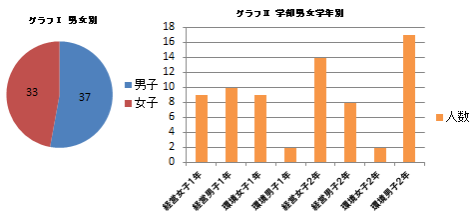
～研究方法～

- 学生アンケートによる聞き込み調査（鳥取環境大学 環境学部、経営学部の1年生、2年生が対象）
- 鳥取県米子市淀江で漁師をされている方にインタビュー

～研究結果① 学生アンケート～

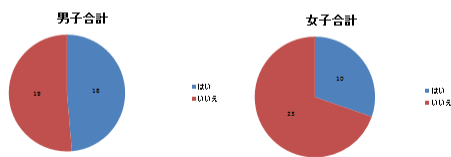
アンケート対象者

経営学部・環境学部 1・2年生 男女 70名



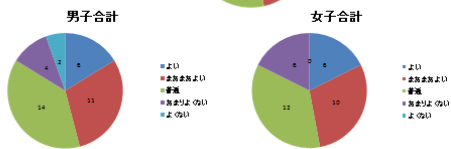
漁師への興味

男子・女子共に、「漁師への興味があるか」という問いに「はい」と答えた割合は過半数を切っており、女子は全体の約2/5と、比較的少ないことがわかる。



漁師への印象

男女共に、漁師への印象は「よい」傾向にあり、漁師という職業に嫌悪感があるわけではない。

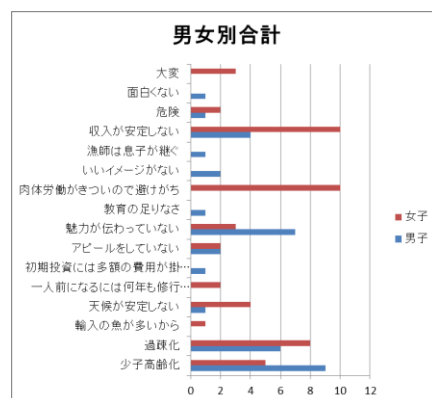


アンケート結果の考察

アンケート対象者は鳥取環境大学 環境学部・経営学部 1, 2年生男女のうち、アンケートに協力いただいた70名だ。学年ごとの偏りがあるが、男女比はおおよそ同じである。

漁師への興味・印象

男子、女子ともに漁師という職に興味を示さない学生は過半数をこえた。一方で、漁師への印象については、よいイメージと答える人のほうが多く、それほど悪印象ではないことがわかる。我々は、若者は漁師に対するイメージが悪くないのに、漁師に興味をもたないのかと考察した結果、就職先としての候補に挙がっていないのだと仮定した。これは、若者があつまらない原因の一つになっている可能性が考えられる。



～アンケートのまとめ～

この結果から漁師の人柄に対して悪いイメージを持つ学生はいなかったが、仕事内容に対しては「厳しい」「つらい」などの考えをもつ学生が多いことがわかった。職業選択の際に、収入が安定した職を選ぶ人が多く、漁師は就職する際の選択肢に入っていないことが考えられる。そのために後継者不足の問題がおきているのではないだろうか。若者が漁師の仕事に興味を持つこと、漁師は安定した収入を得ることができると認識してもらうことが、後継者問題解決のカギになると考える。

～研究結果② インタビュー～

藤井さんのプロフィール

淀江で漁師をはじめて15年
京都大学大学院を中退、その後漁師の道を志す
年収 約一千万
行っている漁法 素潜り漁、トローリング

淀江の漁村について

淀江では、他の漁村よりも漁師の減少にいち早く気づき、漁師の後継者問題にとりくんでいる。若者育成プログラムを設けるなど、積極的な漁師の就業支援を行っている。我々は、淀江で漁師となった藤井さんに、漁師の現状と将来の展望についてインタビューを行った。

若者の想像と漁師の現実

インタビュー結果によって得られた若者の漁師に対するイメージと漁師のくらしの現実について照らし合わせた。

若者の想像する漁師	実際の漁師の生活
→長時間の船上での重労働	→漁の予定は自由に決めることが出来る上に、天候に左右されるので、毎日仕事をしているわけではない
→毎日早朝で働かないといけない	→漁のスケジュールは、各々で決められる上に、禁漁の時間で制限される場合がある
→収入が安定しない	→大漁や時化などの一時的な収入の増減はあるが、漁師によっては養殖業を行い、収入を安定させているところもある。藤井さんは、わかめの養殖を行っているという。
→新鮮な魚を食べることが出来る	→藤井さんの場合は、釣った魚を食べるのではなく、スーパーマーケットで魚を購入して食べるのだという

漁師に向いている人柄

- 漁師は、趣味感覚では続かない、体力の要る仕事である
- 漁師は漁にでた分だけ儲けることが出来る
- 貪欲で、仕事欲のある人柄が向いている

～インタビューのまとめ～

学生による漁師の想像図は、実際の漁師の生活とは大きな差があることが分かった。学生アンケート内で特に多かった、収入が安定しないという項目は、漁師の工夫次第で解消できることが分かった。若者の固定観念が、漁師の印象を悪くしていることが改めて分かった。

～結果の考察・まとめ～

漁業就業者が減少しているのは、漁業に対する若者の認知度が低いことである。若者が、漁師の仕事内容や収入について深く知らないため、なりたい就職先を聞かれたときに、多くの若者から漁業という職業が選択肢に上がらないのだ。中には淀江のように受け入れ態勢を整えている漁村もある。しかし、就職を希望する若者が少ないので、ますます漁村が衰退している。

漁村復興の鍵となるのは、若者への職業アピールを積極的に行うことだと考える。また、子供たちに国産の魚を使って食育を行い、それを通して漁師の存在を身近に感じてもらうことも大切ではないだろうか。